

ジェイムズ・ジョイスの「イヴリン」

南谷 覺 正

群馬大学社会情報学部外国文化第一研究室

A Reading of “Eveline” by James Joyce

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Abstract

“Eveline,” the fourth story in James Joyce’s *Dubliners*, is a pathetic, if somewhat bizarre, story about a girl who wanted to leave Dublin for another life, but was frustrated by an inevitable and tragic catastrophe. This essay is an attempt to probe the possible hidden drama of the protagonist’s apparently innocent narrative, with emphasis on the strong psychic bond between Eveline and her mother, Eveline’s psychological process, and the role that the motif of the Sacred Heart plays in the story. It also discusses in detail the question of what is happening to Eveline at the end of the story and the significance it may have.

—Sinners will find in my Heart a boundless ocean of mercy.⁽¹⁾

「イヴリン」は、『ダブリンの人々』の第4番目の作品で、「思春期」(Adolescence)として分類される作品群の最初のものである。

彼女は夕暮れが通りに忍び込んでくるのを見つめていた。⁽²⁾彼女の頭は窓のカーテンにもたせかけられ、彼女の鼻孔には埃臭いクレトン更紗の匂いがしている。彼女は疲れていた。
(第1段落)⁽³⁾

通行人はほとんどいない。通りの一番端にある家から出てきた男が、自分の家に向かっ

て通り過ぎていった。彼女はその靴音が、コンクリートを踏む音から、石炭殻を踏みしめる音に変わっていくのを聞いていた。新しい赤い家の立ち並ぶ住宅街との境界に入ったのだ。かつては、そこは野原だった。彼女たちは、毎日夕方になると近所の子供たちと一緒にそこで遊んだのだった。しかしやがて、ベルファストから来た男が、その野原を買って住宅街——それは彼女たちが住んでいるような茶色の家ではなく、明るい煉瓦の家で屋根は輝いていた——を造成した。毎日夕方になると、イヴリンの家がある通りの子供たちは、あの野原でよく遊んだものだった。Devine、Water、Dunn の子供たち、足の悪い Keogh、それから彼女の兄弟姉妹。でも、Ernest は一度も遊ばなかった。もう彼女たちよりずっと大きくなっていったから。父がよくリンボクの棒を振り回しながら、彼女たちを野原から連れ戻しに来たものだった。こちらも Keogh が見張りに立って、父がやってくるのを見つけると声を挙げた。それでもあの頃は皆な幸せとっていいような時代だった。あの頃は父もそんなにひどくなかったし、それに母が生きていた。もうずいぶん昔のことだ。彼女も兄弟姉妹も大きくなった。母は死んでしまったし、Tizzie Dunn も死んだ。Water 一家はイギリスに帰ってしまった。何もかも変わっていく。そして今、彼女も同じように、家を捨てて出ていこうとしている。(第2段落)

家(Home)!——彼女は部屋を眺め渡して、これまでずっと、週に1度埃を払いながら馴れ親しんで来たものを一つ一つ見つめた。それにしてもこの埃はいったいどこから来るのだろう。これらのものを見ることはもうないのかもしれない。引き離されるなんて夢にも思っていなかったのに。それにしても、あの壊れた足踏みオルガンの上の壁に掛けてある黄ばみ始めた写真に写っている神父は何という名前なのだろう、ついにわからずじまいになってしまった。横には、聖 Margaret Mary Alacoque に与えられた約束が書いてある「聖心」の色刷り版画がかかっている。神父は父の学校時代の友達だったという。あの写真を見せるときは、父はいつもきまって、彼は今メルボルンにいるんだ、と何気なさそうに言っていた。(第3段落)

彼女は家を出て一緒に行くと同意してしまったのだった。あれは賢明な選択だったのだろうか。彼女は出ていくのといかないのとの得失を考えてみようと思った。家にいれば、ともかくも暮らしていける。まわりには、生まれてこのかたずっと知っている人たちがいる。たしかに、家でも勤め口でも労働はつらい。店の人たちは、彼女が男と駆け落ちをしたことを知ったら何と言うだろう。たぶん馬鹿な女だとも言うだろう。空いた椅子は広告に出されて埋められるのだろう。Miss Gavan は自分がいなくなったら喜ぶだろう。彼女はいつも彼女につらく当たった。特にまわりに人がいる時はきまって。

——Miss Hill、こちらでご婦人方が待っていらっしゃるのが見えないの？

——Miss Hill、もったきびきびなさいよ。

店をやめてもイヴリンはそんなに泣かないだろう。(第4段落)

遠い見知らぬ土地にある彼女の新しい家——そこには違った生活が待っているだろう。そして結婚する——このイヴリンが。そうしたら、人は彼女をまともに扱ってくれるだろう。母がされたような扱い方はされないだろう。今でさえ、もう19歳を越えているのに、時々、父に暴力をふるわれそうになる。あの動悸——あれはきっと殴られるかもしれないと思ってそうなるのだ。まだ彼女たちが幼かった頃、父は、Ernest や Harry は殴ったりしていたけれども、女の子のイヴリンには暴力はふるわなかった。でも最近の父は、死んだ母さんに免じて許してやるが、そうでなければどんな目に遭わせるか……というような脅しを言うようになってきた。今では彼女を守ってくれる者は誰もいない。Ernest は死んでしまったし、Harry は教会の装飾関係の仕事で町を離れて地方回りに出ていることが多い。それに土曜日の夕方、お金についての父との言い合い——あれには疲れ果てた。彼女は稼いだお金をそっくり——7シリング——出している。Harry も出せるだけのお金を送ってくれる。しかし父からお金をもらうのは一苦労だ。父は、彼女がお金をむだ遣いするとか、頭がないとか、骨折って稼いだ金を通りにばらまかれるのは御免だとか、また、もっとひどいことも言った。父は、土曜日の夕方にはかなり飲んでいることが多くて厄介だった。さんざん言い争った果てに、やっと父はお金をくれる。日曜日の食事は大丈夫なんだろうな、と言いながら。それから急いで飛び出して買い物をしなければならない。黒革の財布を握り締め、人混みを掻き分け、買った食料の山を抱えてやっとの思いで家にたどりついたときはもうすっかり遅くなっている。彼女は家庭を守るために働かなければならなかった。それに二人の子供の世話も彼女にまかされている。子供たちがちゃんと学校に行き、きちんと食事をするように面倒を見なければならなかった。つらい仕事——つらい人生。しかし、今こうしてその生活に別れを告げようとしてみると、なんだかそんな生活も、嫌でしかたがないとは思えないのであった。(第5段落)

彼女はもう一方の、フランクとの生活を考えてみようとした。フランクは、とても優しく、男らしい、気さくな人だ。彼女は、今夜の船でフランクといっしょに出たいこうとしている。ブエノスアイレスで、彼の妻となって暮らすのだ。フランクはブエノスアイレスに家を持っていて、彼女はそこに迎え入れられる。フランクを最初に見た日のことは今でもはっきりと覚えている。表通りに面した、彼女がよく立ち寄っていた家に逗留していたのだ。2、3週間前のことのように思われる。帽子の庇をはねあげるようにしてかぶり、門のところに立っていた。そのブロンズ色の顔に、髪が波打つように垂れかかっていた。それから二人はお互いを知るようになった。毎日夕方になると店の外で待ち合わせて、帰りは家まで送ってきてくれた。*The Bohemian Girl* という芝居に連れて行ってくれたこともある。彼と並んで、これまで座ったことがない席に座っていると、何だか得意な気分

なった。彼は音楽が大好きで、自分でも少し歌った。まわりの人たちも、二人がいい仲になっているのに気がついた。フランクが、船乗りを恋した乙女についての歌を歌う時は、いつも嬉しいような恥ずかしいような気持ちになった。彼は彼女のことを、ふざけて Poppens とよく呼んだ。最初は、男の人とつき合うことにただ興奮していたのだが、そのうちに彼を好きになりはじめた。彼は遠くのいろいろな国の話をしてくれた。船乗りになりたての時は、月1ポンドのデッキボーイとして Allan Line の船に乗り込んでカナダへ行った。それからいろいろな名前の船に乗り、いろいろな仕事について——マジェラン海峡の話、恐ろしいパタゴニア人の話。フランクは、ブエノスアイレスで運を当てたと言った。それで、休暇を利用して故国に立ち寄ったのだ。もちろん父は、フランクとつきあっていることを嗅ぎつけ、それから彼と口をきくことを禁じた。ああした船乗り連中がどんな手合いかよく知っているんだ、と父は言った。

ある日、とうとう父はフランクと喧嘩してしまい、以後は彼と会うのにもこっそり会わなければならなくなった。(第6段落)

夕暮れが通りに深まってきた。膝の上に置いていた2通の手紙の白さが、暗がりの中でおぼろになってきた。1通は Harry宛、もう1通は父宛の手紙。彼女は Ernest が一番好きだったが、Harry も好きだった。父は最近少し年老いてきた。彼女がいなくなったら寂しくなるだろう。父も時々優しいことがあった。彼女が1日寝込んでしまったときには、ベッドの脇に来て怪談を読んで聞かせてくれたし、暖炉でトーストを焼いてくれた。またある時には——あの頃は母がまだ生きていた——家族そろって Howth の丘にピクニックに行った。父は、ふざけて母のボンネットをかぶり、私たちに笑わせたものだった。(第7段落)

残された時間はもう尽きつつあったが、彼女は窓際に座り、頭を窓のカーテンにもたせかけ、埃っぽいクレトン更紗の匂いを嗅ぎ続けていた。通りの外れのほうで手回しオルガンの奏でる曲が聞こえてきた。知っている曲だった。奇妙なことだ、よりによってこの日に、母と交わした約束を思い出させる手回しオルガンがやってくるとは。彼女は母に、自分にできるかぎり家を守っていくと約束したのだった。病気の母の最後の日のことが思い出されてきた。ホールの反対側にある暗い風通しの悪い部屋にいて、もの悲しいイタリアの曲が流れてくるのを聞いたのだった。オルガン弾きに、追い払う言葉とともに6ペンスが渡された。父が、イタリアのこんちき野郎め、こんなところへ来やがってと毒づきながら、病室にもったいぶった足取りで戻って来た。(第8段落)

彼女がもの想いに耽っていると、母の人生のもの悲しいヴィジョンが、彼女の存在の急所に呪文をかけるような気がした——何の取り柄もない、最後には心まで狂わせてしまった犠牲の人生。イヴリンの耳に、狂った母が、愚かなまでの執拗さで何度も何度も言って

いた言葉が聞こえて来た。彼女は身震いした。

——Derevaun Seraun! Derevaun Seraun! (第9段落)

イヴリンは突然恐怖の衝動に駆られて立ち上がった。逃げなければ！何としても逃げなければならぬ！フランクが救ってくれるだろう。彼女に生を与えてくれるだろう。ひょっとしたら愛も。とにかく私は生きたい。なぜ私が不幸にならなければならないのか。私にだって幸せになる権利がある。フランクが私をその腕で受けとめてくれる、私を包んでくれる、私を救ってくれる。(第10段落)

* * * * *

彼女は North Wall 駅のうごめく群衆の中に立っていた。彼が彼女の手を取った。彼は彼女に、これからの航路について何度も話しているらしかった。駅は茶色の鞆を持った兵士たちでごったがえしていた。駅舎の幅の広いドアの向こうに、船の黒々とした塊が覗いて見えた。舷窓が光り、埠頭の岸壁に横づけになっていた。彼女は何も答えなかった。頬からは血の気が失せ、冷たくなっていくのが感じられた。迷路のような心痛のただ中から、彼女は神に導きを求めて祈った。どうすることが自分の義務なのか。船が長い、もの悲しい汽笛を霧の中に流した。あの船に乗れば、明日はフランクといっしょに海上にいて、ブエノスアイレスに向かっていることだろう。船の切符は2人分予約されている。彼女のためにこれだけ骨折ってくれた後で、なおも引き返すようなことができるだろうか。苦しみのあまり、彼女の体内に吐き気が生じた。彼女は無言の熱い祈りを唱えて唇を動かし続けた。

乗船を促す鐘の音がイヴリンの心臓に響きわたった。彼女はフランクが彼女の手をつかむのを感じた。

——Come! (第11段落)

世界中の全ての海が彼女の心臓に波打って押し寄せた。彼は彼女を海の中に引き込もうとしている。彼女は溺れてしまうだろう。彼女の両手は鉄の手すりを激しくつかんだ。

——Come!

否！否！否！それは絶対にできない。彼女の手は鉄の手すりにさらに強くしがみついた。世界中の海のただ中で彼女は苦悩の叫びを挙げた。

——Eveline! Evvy! (第12段落)

彼は柵の向こう側へ飛び出し、彼女についてくるよう呼びかけた。後ろから早く行けどどなられながら、それでも彼は彼女に呼びかけ続けた。彼女は、その蒼白な顔を彼の方に向けていた。追いつめられなされるがままとなった動物のような表情を浮かべて。その目には、愛もなく、別れの情もなく、彼を識別している様子もなかった。(第13段落)

II

「イヴリン」の冒頭部のトーンには、「少年期」の作品群のそれとははっきりと異なったものが感じられる。それは、“The Sisters” “An Encounter” “Araby”の、名前を与えられていない「少年」の主観的独白形式から、イヴリン (Eveline) という19歳の女性の、一応客観的な体裁を整えた物語形式に移行していることも与っているであろうが、最も大きな要因は、イヴリンの意識そのものが「少年期」の喪失感に深く隈取られていることであろう。夕暮れになってもいつまでも野原で遊ぶ回想の中の子供たちの姿は、「少年期」の作品群に印象的に描写されていたものと似かよっているが、今それはイヴリンの追憶の中にその残滓を保っているだけで、当の少年、少女たちは成長してしまい、またある者は死に、ある者はよその土地に移っていなくなっている。そしてそれを象徴するかのように、遊びの舞台であった野原も、住宅地の開発によって失われている。

Eveline (Eveのdiminutive) という名前は、⁽⁴⁾ 実在の隣人にちなむということだが、どんなに貧しい少年期であっても、失われて見れば、当時は夢にも思わなかったような光彩を帯びた「エデンの園」であったというモチーフにふさわしい。現代のイヴを、父親の振り回すリンボク (blackthorn) の杖のように、園から追いたてるものは、「時間」という、現代人にはほぼ強制的と言ってもいいような、もう一つの寓話である。

「イヴリン」の冒頭部で、通りのはずれにある家から出てきた男が、自分の家に帰ろうとしている。通りのはずれにある家は、「少年期」の作品群で読者に馴染みのある茶色のくすんだような家であり、彼が行こうとしている家は、Belfast 出身の男が新興住宅街として開発した“bright brick houses with shining roofs”の一つである。イヴリンは、その男を見てはおらず、目はぼんやりと通りを眺めているだけで、男の通過は聴覚的に、つまり開け放ちの感覚器によって捉えられているだけなのだが、しかし、“she heard his footsteps clacking along the concrete pavement and afterwards crunching on the cinder path before the new red houses.”という文章には、道を踏む音の違いによって、時代の変遷が感受されている。人気のない夕暮れの通りを孤影を引き連れて歩む、元来が茶色の家で育ち、新興住宅を購入してそこに移り住んだに違いない男の、この短い道行は、彼の半生の象徴でもある。外面はきらびやかな新興住宅は、その石炭殻を敷きつめた道を踏み締める音にも似て、どこか安手な、空疎なものを感じさせる。また、そこそが、かつての「少年期」の「楽園」であったとすれば、その音は、どこか悲哀の音調さえ帯びているようでもある。

実際、時間の経過の意識は、イヴリン自身においても顕著である。“She sat at the window watching the evening invade the avenue.”の“invade”は、「時間」の人間生活に

対する侵略的な敵意を含ませた言葉になっている。「イヴリン」は物語の進展につれ、現在の場面が、イヴリンがフランクと駆け落ちをしようとする当日の、しかもあと何時間かしかないという、せっぱ詰まった状況にあることが読者に次第に明らかにされていくという結構になっていて、時間の情容赦のない進行が、今の冒頭の文章、及び“The evening deepened in the avenue.”（第7段落）、さらに引き続いての、“Her time was running out...”（第8段落）によって強調されている。このように、「イヴリン」においては、決断を迫られている刻限に至るまでの時間の経過に対する意識が、「少年期」が速やかに喪失されていった感慨の中で展開されるという、時間の対位法が存在している。

その時間の「侵略」に対するイヴリンの反応は、19歳にしては驚くばかりに受動的で諦念的である。“Her head was leaned against the window curtains and in her nostrils was the odour of dusty cretonne. She was tired.”という文章は、少女のぐったりとして窓に頭をもたせかけている姿勢を想起させ、“was leaned”の受動形は、そのままイヴリンの心の受動性の反映となっている。⁽⁵⁾彼女の鼻孔に侵入してくる dust は、人間がそこから造られ、またそこへ帰って行く element であり、彼女の鼻孔の中で、思うさま「死の舞踏」を踊っているのであろうが、彼女はその侵入を嫌悪していないのみならず、これらの埃が一体どこから降ってくるのかと素朴に訝っている。それは一面で、イヴリンが、時間の侵略を知的に掌握できず、まったく無防備にそれに身をさらしていることを暗示している。

時間的に逼迫した第8段落においてもイヴリンの姿勢は変わっていない。この受動性は、彼女が置かれている駆け落ち直前という事態と著しい対照をなしている。本来であれば、心を浮き立たせているはずなのに、イヴリンはもう老人のように、万事に対して観照的になっている。彼女の感覚器官の用い方も、先述のように、目で能動的に歩行者を追うということはず、ただ受動的に感覚に入ってくるものを意識に上らせているにすぎない。それは“She was tired.”という表現に端的に要約されているが、何が一体イヴリンをそれほどまでに疲れさせたのであろうか。

イヴリンは、一人の歩行者の足音の変化から、まず、今は失われてしまった野原を、次にそれに付随して、失われてしまった遊び友達を思い出し、そしてそうした喪失感から、“Everything changes.”という無常観を吐露している。こうした感慨は、「思春期」という通念にそぐわぬものかもしれないが、現実には、「思春期」こそこうした感慨を懐きやすい時期にあたっている。生殖という生涯の大きな節目をなす現実に直面する前には、様々な心理的擬態が演じられるはずで、「無垢な」少年期への郷愁もその一つになりうる。彼女の思索には、駆け落ちの最も肝腎な部分である「性」が完全に欠落——つまり自分自身にも隠匿——している。何もかもがうつろう世であれば、一人の男の感情などどれだけ信頼するに値するものだろうか——そういった不安が、おそらくどの若い女性をも——まことに

正当に——襲うのであろうが、それは同時に、生殖に必然的に伴う本能的な恐怖を隠蔽する一種の偽装工作にもなっている。

「イヴリン」では、主人公を3人称に設定した客観的描写に移行していると述べたが、実際には、よく指摘されるように、全編これイヴリンの肉声というほどに、主人公の意識に密着した語りになっている。語られるものは主人公の意識であって、語り手の「無謬な」解説ではないから、通例の小説の語りであれば、decency から省略しうる事柄も、こうした手法でいけば、もし多くのことにおいて「真実」を欲するなら、省略しえないことになる。ゆえに、この物語において性についての考えが欠落しているのは、イヴリンの思考にそれがなくなることになる。しかし、彼女がそれを自分自身にも隠しているかもしれないことは、うっかりすれば読者に露見しかねない。そのアイロニーが、この作品の妙趣の一部になっている。

従って、ここには19歳の女性の思考——無論、ジョイスがそう思っているもの——が生みの形で提出されていることになる。そこで、イヴリンの思考様式を反省的に分析して、そこにジョイスが盛ろうとした特質を少しばかり見てみたい。第2段落では、前述したように、男の足音の変化が、遊び場の喪失の記憶を呼び、それが、かつて遊んだ友達の喪失の記憶につながり、そしてすべてはうつろうという詠嘆を経て、自分も変化に、「少年期」から出ていかななくてはならない変化に直面しているという述懐に至っている。しかし第2段落の終わりに出てくる“home”という言葉に彼女の追憶は躓き、一瞬はっと目覚めたかのように少し生気づき、自分のこれまでの“home”を構成してきたものを一つ一つ検証するという作業を始めている。その過程で、ふと目に入った黄ばみ始めた写真からの連想で、記憶の中から響いてくる父親の“He is in Melbourne now.”という言葉に至る。

その言葉が同じく海外に出ようとしている自分の身の上に接続して、そうだ自分はここを去るという約束をフランクとしてしまったのだったという先程の意識に戻ってくる。だが今度は、今見た自分に親しい事物との絆にほだされたかのように、ここを出ていくのが賢明かどうかをもう一度考えてみようとする気持ちが生まれている——家にいけば、雨露はしのげるし食べてもいかれる、回りの人達も知った人達ばかりだし、嫌なことといたら仕事も家でも勤め先でもつらいことだ——そして、職場でどのような反応があるかという心配と、意地悪な Miss Gavan の嫌みな言葉の回想に捕えられる。

第5段落では、調子を変えてフランクと始めようとしている新しい“home”について想像の翼をはばたかせようとする。ちゃんと結婚すれば、夫人として人から敬意を以て遇せられるだろう。しかしその考えは、母親が受けた劣悪な扱いの記憶に、それから、現在の父の粗暴な言動、自分を守る兄弟がいないこと、土曜日の金銭をめぐる父親との言い争い、買い物之苦労、2人の小さな子供たちの世話といった現在の苦労へと落下していく。つま

り、未来に対する明るい予想をしようと意図的に始められた思考は、たちどころに現実のしがらみに捕えられるのである。そして、こうした、どちらかと言えば negative な、彼女の出立を補助してくれそうな現在までの生活に対して、彼女は意外にも、“Now that she was about to leave it she did not find it a wholly undesirable life”というむしろ肯定的な評価を下すのである。フランクとの新生活の明るい面を自分に言い聞かせるかのようにして始められた省察は、こうして不首尾に終わっている。

そのことを自覚したのかどうか、イヴリンは、第6段落においても一度思考の糸をたどり直そうとする。フランクは、優しい、男らしい、気さくな人だ。そして、フランクと最初に出会った時のこと、一緒に劇場へ連れて行ってもらった時の楽しい思い出、フランクがこれまでの経歴を話してくれたときの回想——しかし楽しい思い出は、再び、結局父がフランクとのつき合いを禁じ、仲違いをしてしまったという決定的に不幸な事実と逢着しその勢いを失ってしまう。ここまで読んだ読者は、イヴリンがフランクと親の承諾を得ないまま、こっそりと夜の船で逃げ出そうとしているという状況と、そうした行為に対して、フランクには承諾の返事を与えたものの、いまだにふんぎりのつかない彼女の気持ちを察知するのである。

第7段落に至って、通りは薄暗さを増し、いよいよどちらかに決断しなければならないことを告げる。しかし彼女の心はむしろ現在の生活に自分を繋ぎ留めようとするほうに働き、今まで悪いことを考えてきた父親の良い面を考え始めさえしている。そのことが、“The white of two letters in her lap grew indistinct.”という文章によって鮮明に読者に伝わってくる。膝の上に置いた2通の手紙は、父と Harry に宛てた、自分が家を出て行くことを告げた別れの手紙であるに違いない。それを膝の上に置いていることからして、彼女は出発の準備は済まして、最後に手紙を持って、自分の生れ故郷の見納めにと窓の外をぼんやりと見やっていたのだと推測される。そしてそこからふと生じたもの想いの過程で、最初はくっきりと浮き出していた手紙の白さが暗がりの中に埋没していくように、彼女の最初の決断は鈍っていくのである。

第8段落冒頭の、“Her time was running out but she continued to sit by the window, leaning her head against the window curtain, inhaling the odour of dusty cretonne.”という文章を読むと、イヴリンの姿勢から考えて、このまま行動に移行する可能性は薄いように思われる。むしろこのままぼんやりとしているうちに船の出港時間が過ぎ、気がついてみたら時間が過ぎてしまっていたという既成事実を得ることによって、決断の労を省こうとしているようにすら見える。

論理的な道筋を見失いやすく、思いつくいろいろな心象に重く引きずられるような思考形式を取るイヴリンは、決して明晰な頭脳に恵まれているとは言い難い。その回想の中に

出てくる、Miss Gavan の非難の言葉、父親の、お前には頭がないという揶揄、フランクの“Poppens”という綽名などから推測して、むしろ知的には鈍重な、機転のきかない女性像が浮かんでくる。“Then she would be married——she, Eveline.”（第5段落）という言葉を見ても、彼女自身が、自分が結婚できることに半信半疑のような気持でいることが分かる。冷厳な目で見れば、イヴリンは、店で売り子としてぐず扱いされながら、週に7シリングという最下等の賃金で働き、家で家事をするだけが分相応であるようにも見受けられる。それでも彼女は、店の職場を涙なしには去れぬ（「そんなに泣かない」というのは、やはり未練を残している証拠）であろうし、家事に追い使われる生活をそれほど恨んでもいない。フランクが船乗りを恋した乙女の歌を歌うと、何と言っていいかわからずにどぎまぎしてしまうほど、男とのつき合いにおいてもうぶである。

しかしながら、イヴリンがまったく純粹無垢の少女であると想像することには注意が必要であろう。自分は、自分の生活を家族のために犠牲にしている、それなのに——というのが彼女の自画像であるのだが、果たしてそれを額面通りに受け取ってよいものだろうか。彼女は、Harry が余裕がある分だけ、父親は言い争いの揚句にしぶしぶ、生活費を出しているのに対して、自分は働いて稼いだ金でなけなしの給金をそっくり家計のために供出しているという。しかし、フランクに劇場に連れて行かれた時のことを述べた“*He took her to see The Bohemian Girl and she felt elated as she sat in an unaccustomed part of the theatre with him.*”という陳述を見ると、劇場には以前から出入りしていたことが窺える。おそらく最も安い席であったかもしれないが、ともかく入場には幾許かの金を払わざるを得ない。あるいはそれが、父親の「骨折って稼いだ金を通りにばらまかれるのは御免だ」という非難と関係を持っているのかもしれない。酒を飲んだ父親があらぬことを口走っているとも取れるが、完全に潔白な殉教者のような娘を捕まえてそのような捏上げは言えないであろう。またフランクと最初に出会った場所も、“a house on the main road where she used to visit”とあって、何の用事で訪れていたかは言及されていないが、仕事や家事のための訪問ではなさそうに思われる。

「イヴリン」は、最も表層的なレベルでは、主人公が、恋人とせっかく手に入れられそうになった幸福を、ダブリンの「麻痺」に陥って取り逃がしてしまう悲劇として読めるであろう。しかしながら、ブエノスアイレスに果たして幸福が待っているのかどうか不審に思う読者が出てきても必ずしも外的な勘ぐりとは言えないような節もある。フランクがどれだけ真剣にイヴリンを愛していたか、その確証を読者はイヴリンの回想の中に見いだすことができない。また何の資産もなく、デッキボーイとして始めた船乗りが、ブエノスアイレスでどのようにして家屋敷が買えるほどの幸運を射止めたのか、具体的な話はイヴリンに対してなされていないし、彼の家族がどこで何をしているのか、ブエノスアイレスで

どのような生活を与えようとしているのか、生涯の伴侶の選択において慎重な女性なら結婚に至る過程で決してないがしろにはできない情報も欠落している。イヴリンの想像するブエノスアイレスでの新婚生活は、まるで歌の中の話でもあるように具体性を欠いたものに終始している。考えようにも考える手づるが与えられていないのだ。海のかなたの見知らぬ土地、マジェラン海峡、恐ろしいパタゴニア人の話——Othello 将軍のように魅惑的に話すフランクではあるが、そのようなことなら貧乏水夫にでもできる話にすぎない。また、幸運を射止めた男にしては、芝居見物に一度連れて行っただけなのは釣り合っていないようでもある。そして何よりも、船が出る時にイヴリンが行くのを拒んだ時、なぜ留まらないで一人で行ってしまったのかという疑問は容易に払拭できないものである。夜の船が向かうリヴァプールまで連れて行って慰み物にしようとしていたのではないか、どこか異国の悪所に売り飛ばそうとしていたのではないか——そんな想像さえ浮かんでくる。父親につきあうことを反対されると、蔭に隠れてこっそり会い、挙句の果てにブエノスアイレスへ駆け落ちして結婚しようというやり方自体が、イヴリンの評価とは裏腹に、はなはだ男らしくないものである。駅に茫然と立つイヴリンにフランクは航路のことについて何度も話しかけている——真に愛する人間と駆け落ちしようとしている男が、航路についてくだくだしい話をするものだろうか。推測の域は出ないものの、読者の心証がむしろ否定的なほうに傾いても不自然ではないように思われる。

物語に登場するもう一人の主要な男性の登場人物であるイヴリンの父親は、どのような人物として解釈すればよいものであろうか。酒飲みで、粗暴で、家族にも暴力をふるい、母親を粗雑に扱い、母親が死んだ後は娘を酷使し、吝嗇である、悪しき夫、悪しき父親というのが圧倒的な印象としてまず残る。子供時代のイヴリンたちを家に追い返すために振り回した blackthorn の杖も、“strife”の象徴であるとされている。⁽⁶⁾イヴリンの現在の不幸を齎した張本人と言ってもいいかもしれない。しかしイヴリンの意識に登場する過去の場面を拾い出してみると、この父親の愛すべき面も浮かんでくる。肯定的な文脈で意図的に回想されているから当然とはいえ、イヴリンが病気の時に本を読んで聞かせたり、トーストを焼いて食べさせたり、家族を連れてピクニックに行ったり、おどけて子供たちを笑わせたりするところには、人間的な暖かみが感じられるし、またそうでない回想部分においても、病気の母親が伏しているときに、陰気なオルガン弾きを追い払ったりするのは自分の妻を気づかっている証拠であるし、気のきかない娘に腹が立って手を出したくなくても死んだ母親に免じて出さずにいるところは、死んだ妻を忘れずにいる証拠でもある。また、それが精確な判断かどうかは議論が分かれるところだろうが、ともかくも自分がやくざだと思っている人間とのつき合いを禁じているのは、やはり娘の身を案じる気持ちから出ていると考えられる。そうしてみるとフランクの場合とちょうど対照的に、粗暴なイメージ

の蔭に、芯は優しい心情の持ち主としての別の一面が覗いていることになる。

イヴリンがうんざりしている土曜日ごとに繰り返される金銭をめぐるの諍いも、金を最後まで渡さないというのであれば別な話だが、最後には譲って金を渡しているのであれば、その前に行われる言い争いは、父親のほうにしてみれば一種のゲームのようなものとして行われているだけかもしれない。“[Have you] any intention of buying Sunday's dinner?”という言葉には、どこか *jesting* の趣がありそうにも感じられる。

イヴリンは、この2人の男性のどちらかを捨てなければならない岐路に立たされて悩むわけだが、読者が懐きがちな、乱暴な年老いた父親を否定し、若く優しい恋人を取るという先入観も、今述べたことを考えると怪しくなってくる。事実、フランクに対する彼女の感情で、“like”という言葉は使われていても、“love”という言葉は一度も使われていない。また、“He would give her life, perhaps love, too.”(第10段落)という言葉から判断すると、イヴリン自身、フランクの自分に対する愛情には確信を持っていないようである。それに対して、“Her father was becoming old lately, she noticed; he would miss her.”

(第7段落)という言葉などには、しっかりとした感情の实质が感じられるし、イヴリンも父親が自分の存在を大切に思ってくれていることを意識しさえしている。だからこそ、イヴリンは現在の生活を否定し切れないし、父親を憎むことができないのである。母親が死んでからは、イヴリンが母親がわりの役割を務めていて、父親にとっては疑似的な伴侶としての意義さえ帯びてきているのではないだろうか。

しかし何と言ってもこの物語の悲劇を構築する上で決定的に重要な役割を果たしているのは、イヴリンの死んだ母親である。イヴリンの意識に上ってくる母親に関する回想を時間の順に整理し直すと、父親と一緒に暮らすようになって、味気ない家事に埋没した自己犠牲の長い生活の果てに、病気になって寝込む。そして命旦夕に迫った日、通りでイタリア人の音楽師が手回しオルガンでもの悲しい音楽を奏で、それを父親が追いつく。死期が迫ったことを悟った母親は、イヴリンを枕元に呼んで、残された2人の子供をきちんと育て、父親の世話をすることをイヴリンに頼み、イヴリンはそれを約束する。それから彼女は精神の平衡を崩し、不可解な譚話を何度も白痴のように繰り返した果てに息を引き取るのである。

はっきりとは断定し難いが、“Then, she would be married——she, Eveline. People would treat her with respect then. She would not be treated as her mother had been.”

(第5段落)という箇所などを読むと、イヴリンの「結婚」に対する誇大とも言える期待に、父親と母親の結婚には何か変則的なものがあったのではないかという感触が読み取れなくもない。しかしそれはひとまず措いて、イヴリンの母親の生活が自己犠牲の生活であったことは間違いのないことであり、それが悲惨な病気と発狂の主因であったことも確かである。

あろう。

第8段落において、イヴリンは、不決断のまま、時間の経過によって、いわば受動的に家に留まるような雰囲気を見せていた。ところが折しも、例の手回しオルガンの、母の臨終の時に奏でていたのと同じもの悲しい曲が流れてくる。それが、母の最後の日を思い出させ、家を守っていくと母に誓った言葉を思い出させる。しかし、思い出がさらに母の発狂とその“Derevaun Seraun! Derevaun Seraun!”という譚語に及ぶと、突然、イヴリンは恐怖に襲われて立ち上がり、駅に向かうのである。

母親の日常生活に埋没した自己犠牲の生涯、そしてそれが直接、間接に招いたのであろう病気と狂気と死——それに自分が巻き込まれてしまうことに対する本能的な拒絶反応が、こうした発作的な行為に駆り立てたのであろう。“Why should she be unhappy? She had a right to happiness.”という叫びにも似た声に、生物としての人間の自然な主張が籠められている。そして逆に読者は、ここまでイヴリンをして家庭に忠誠を尽くさしめた一番の根幹に、母の遺言があったのだということを知るのである。それは、自己犠牲の生活を強いる遺言であった。多くの女性が忍んできた、そして母から娘へと連綿と継承されていく自己犠牲の生活——それは一面で、嫉妬の気味さえ帯びた呪縛に相違ない。けれども逆に、父親が「死んだお前の母親に免じて」暴力に訴えるのを思い止まっている箇所などを見ると、イヴリンをここまで守ってきてくれたのも死んだ母親だったということになる。あるいは母親は、臨終の間際に父親にも、イヴリンのことを言い置いて、父親もそれを約束したのかもしれない。

第11段落の、駅の雑踏の中に立ちつくすイヴリンの姿は、決断して心の平静を得ている人間のそれではない。先程の恐怖から来た panic から未だ醒めやらず、意識の焦点が動揺して定まっていないように見える。手を取り話しかけるフランクにもそれほど注意を払っていない。駅は茶色の鞆を持った兵士たちでごったがえしている。(兵士たちは国に対する忠誠に文字通り命を懸けた人間たちで、やはり自己犠牲の精神を暗に説いているかに見える。)またドアの向こうに垣間見える巨大な船の姿も恐ろしげな運命を暗示しているようだ。どうしていいかすっかり混乱して途方に暮れたイヴリンは、自分の義務 (duty) が何であるか示してくれるように神に祈る。船の汽笛が鳴る。しかしその悲しげな音は、啓示として解釈しようとしても、乗るように勧めているのか、留まるように諫めているのかはつきりしない。イヴリンは、フランクがもう渡航の手配をすましてしまっているのに今さら引き返せるだろうかと自分を無理にも前に押しやろうとする。しかし体内に吐き気が生じ、彼女は熱い祈りに唇を震わせ続ける。大きな鐘の音が鳴り響き、フランクが手を取り、行こうと誘う——その時、世界中の海がイヴリンの心臓の周りに押し寄せ、彼女を溺れさせようとする vision が襲いかかり、彼女は手すりにしがみつく。

III

「イヴリン」においても、「少年期」の作品群に一貫して見られた、逃避とその挫折という主題が継承されている。イヴリンの数少ない家族との楽しい思い出であろう Howth の丘へのピクニックが彼女の一番の遠出であったかもしれないほど、彼女は狭い生活圏内に閉塞されている。*The Bohemian Girl* という劇、フランクのしてくれる見知らぬ土地の話等から、外の世界の魅惑的な風が吹きこむにつれ、ここに住み続ければ自分は間違いなく悲惨な最期を迎えてしまうという脅迫感、母親の因習的な生を否定し逃避を憧憬するような気分が醸成される。しかしその逃避の試みは、ダブリンの「麻痺」によって結局不毛な挫折に帰してしまう。イヴリンは、若い恋人と憧れの外国で幸福をつかめたかもしれない機会をおそらく永久に失ってしまうのである。

物語の climax になっている、洪水に呑み込まれるような神話的なイメージは、あるいは唐突な、奇を衒った印象を与えるかもしれないが、それは決してそうではなく、この作品で最も周到に準備されているものであり、必然的な性格を備えている。先に、夕暮れが深まって行くのに合わせて、時間が、ちょうど川の流れが滝に向かって加速度的に流れを速めていくように、運命の刻限に向かって刻一刻と迫って行く時間的な構成を述べたが、それに平行して、もう一つの psychic な劇が、やはり最初はゆっくりと、そして次第に流れを速めながら最後の catastrophe に向かっていくように思われる。

第1段落と第8段落でイヴリンの姿勢が変わっていないことを先に指摘したが、前者の“Her head was leaned against the window curtains and in her nostrils was the odour of dusty cretonne.”という文章と、後者の“she continued to sit by the window, leaning her head against the window curtain, inhaling the odour of dusty cretonne.”という文章を注意深く比較してみると、前者の完全な受動性に対して、後者では、“lean”や“inhale”という能動形によって、微かではあるが animation が生じているのに気づくであろう。最初の、過去の喪失に対する沈滞した調子は、“home”という言葉の clue として、比較的生気を帯びた追憶に向かう。その際には頭を実際に窓から離して辺りの事物を眺めている。そしておそらく、再び頭をさっきと同じ位置に戻したのであるが、心の中には、行くべきか留まるべきかという疑念が生じ、それについてあれこれ思い巡らすようになっている。そしてこの心理的变化をもたらす隠れた触媒の役割を、黄ばみ始めた写真が果たしている。

イヴリンの思考は、これまで見てきたように、直線的には進まず、いろいろな脇道にそれながら進んでいき、その過程で様々な過去が蘇り、読者はイヴリンの置かれている立場を知らされるようになっていくのだが、同時に、過去に触れるたびに、その過去に味わった感情が追体験され、イヴリンの心を少しずつ昂ぶらせていることも見逃してはならない。

Miss Gavan に恥をかかされるつらさ、フランクに *The Bohemian Girl* に連れて行ってもらった時の elation、年老いてきた父親が優しく楽しかった時のしんみりとした感情——それらの感情は、イヴリンの心をいわば少しずつ波立たせ、時間が切迫して行く律動とともに、最後に彼女を襲う、“a sudden impulse of terror”の序曲を形成しているのである。

イヴリンに決定的な衝撃を与えるのは、言うまでもなく、母親の発狂という記憶であり、“Derevaun Seraun! Derevaun Seraun!”という譚語は、読者にも不気味な印象を与えずにはおかない。いずれ狂人の言葉だからと割り切れれば簡単であるが、“foolish insistence”を以て語られているとなると、母親はやはり何かを訴えようとしていると見るべきであろう。これに関してケルト語にその源を探ろうとする試みは決して無意味ではないと思うが、最も重要な情報を、ほとんどすべての読者がまったく不案内な言語に盛るとするのは作家の立場として取りにくいと思われる。やはりこの譚語は、音として“drown”と“sea”をその中に含んでいるというのが、一番自然な解釈になるとと思われる。そうすると、イヴリンを襲った洪水の奇怪な vision は、断末魔の母親をも襲っていたのではないかということになる。

第9段落冒頭の“As she mused the pitiful vision of her mother’s life laid its spell on the very quick of her being”という文章は、この母と娘の心霊的な掛金が音を立てるように噛み合ったというような強いニュアンスを含んでいるが、それによって読者は、イヴリンにも母親と同じ何か“pitiful”なものが襲うのではないかという潜在的な危機感を与えられる。終局の場面でイヴリンは“a cry of anguish”を挙げたとなっているが、それはどのような叫びであったのだろうか。それまで、フランクは“Come!”という呼びかけを二度繰り返している（そしてその2度の呼びかけの調子は互いに異なったニュアンスを持っている可能性を孕んでいる）が、この叫びの後では、“Eveline! Evvy!”に変わっている。また、この叫びの後で、フランクはイヴリンを置き去りにして、しかも飛び出すように（“rushed beyond the barrier”）乗船口に向かっている。それはイヴリンの叫びに何か奇怪なものがあつたことを暗示してはいないだろうか。

イヴリンを思索に導く糸口となった黄ばみ始めた写真は“priest”の写真であつて、それは父親の学校時代の友人であるという。何の変哲もない一挿話のようではあるが、しかしイヴリンを訝らしめ、また読者も訝ってしかるべきなのは、この長い年月、この神父の名前が何であるかどうしても知ることができなかつたということだ。父親の友人——しかも壁に貼っておくほどの仲の友人——であるならば、その名前が話の中に出てこないのは不自然であるし、またイヴリンの口調は、自分で写真を調べてみたり、両親に聞いてみたりしたにもかかわらず知ることができなかつたと言わせているようであるから、そうなる不自然さは一層募ってくる。

イヴリンの兄の Ernest についても、読者は釈然としない読後感を懐く。最初は、イヴリンの子供時代に、一度も皆と一緒に遊ばなかったこと、それはもう大きくなってしまっていたからであること（第2段落）次に、Harry 同様、父親によく殴られていたこと、死んでしまったこと（第5段落）、そして最後に、イヴリンは Ernest が一番好きであったこと（第7段落）が語られる。しかし、そのように愛情を持っていた兄弟であるならば、どうして子供時代の喪失を詠嘆し、死んでしまった人間を追懐する“her mother was dead. Tizzie Dunn was dead, too …”という箇所で言及がなされないかのであろうか。また、彼女の「姉妹たち」についても、成長した後どうなったのかまったく触れられていない。さらにイヴリンにその世話が任されたという“two children”は、年齢的にイヴリンの兄弟ではないだろうから、イヴリンの甥か姪だと考えるのが妥当であろうが、誰の子供で、その親はどうしているのか、読者には何も知らされない。手掛かりは与えられていないので推測のしようもないが、そこに語られざるものがあることだけは確実だと思われる。

件の神父についても想像を逞しくする他はない。写真の下には壊れたオルガンがある。壊れているのにそこに置かれているのは、何かの記念品だからに違いない。もし母親がオルガンをよく弾いていて、それが壊れたものなら、その旨何らかの説明があってもよいところだ。写真の隣には「聖心」の色刷り版画が掛けてある。「聖心」の信仰は母親のものであろう。父親は、この神父の写真を人に見せるたびに、“He is in Melbourne now.”と“casual”な調子で言っていたという。こうしたことと、前に少し触れておいた、母親がどうも父親と一緒にいるに際して何か変則的な事情がありそうだということ、長男であろう Ernest がイヴリンや Harry とかなり年齢的な隔たりあり、しかもまったく一緒に遊ばなかったということ、母親が死に際してイヴリンと同様の海に溺れる vision を見ているらしいことを考慮に入れると、母親とイヴリンの運命の相似性は、さらに深まりを見せて、母親にも、若い頃に、何かイヴリンと同じようなロマンスの萌芽があって、それが悲劇的な挫折に終わったのではないかと想像されてくるのである。写真の神父と壊れたオルガンは、その物語と関係を持っているようである。恣意的な想像に見えるかもしれないが、逆にそういう想定をしなければ、母親のあのような狂気は、日常性に埋もれる苦しみというだけでは説得力を欠くように思われる。この家庭には、触れられたくない複雑な過去がある。神父の名前についての両親の頑なな沈黙はそれを裏書きしている。彼が今メルボルンにいるという父親の殊更めいた“casual”な調子も、却ってそこに“casual”でないものの存在を感じさせるのである。

物語の最後に提示されている、“She set her white face to him, passive, like a helpless animal. Her eyes gave him no sign of love or farewell or recognition.”というイヴリンの表情はどういう内面的消息の表われなのであろうか。ただ恐怖に駆られて呆然としてい

るというのではない。“recognition”すら失っているのは、人間としての機能が正常に作動していないことを物語っている。先程の死んだ母親との無気味な默契からしても、何か決定的な一線が越えられたという感触は否定しえない。（「姉妹たち」の結末部の回想の中の神父の、“Wide-awake and laughing-like to himself…”という、これもこの世の人間の顔とは思われぬような表情が想起される。執筆順序から言えば、「イヴリン」は「姉妹たち」に続いて *Irish Homestead* に発表された作品で、ジョイスの側に、ダブリンの「麻痺」を強烈に提示するという意図があったというのは十分に考えられることであり、その意味では、病的な“paralysis”の顕現として「姉妹たち」と一対をなしているのかもしれない。）

この最後の catastrophe に至る過程を少し注意深く見てみると、イヴリンの内面的な緊張が、手すりにしがみついた2度の描写で、その強度を増しているのがわかるが、その clue となっている“A bell clanged upon her heart.”と“All the seas of the world tumbled about her heart.”という文章において、どちらも“heart”に対する衝撃であるということが強調されているのが注目される。この物語において、イヴリンの身体の部位の言及が何か所かでなされているが、⁽⁷⁾ 身体の周辺部位への言及が続いた後での“heart”への衝撃の描写は、いよいよ「麻痺」の侵略が中心へ及んで来たという感じを読者に印象づけるのである。

しかしもっと注意深く読むと、この心臓への衝撃の予感、“She knew it was that that had given her the palpitations.”（第5段落）という箇所にて予め巧妙に布石として示されている。イヴリンは、この「動悸」は父親に暴力をふるわれるそうになることが原因だと考えているが、彼女の delicate な心臓は、恐怖に立ち上がった時には激しく動悸していただろう（彼女の息堰切ったような意識の流れはそれを物語っている）し、駅に佇んでいる時も危険なまでに脈打っていたであろうと読者は物語を振り返って悟るのである。それが最後の場面の決定的な心臓への衝撃の予兆になっている。ちょうど、フランクに最初に会った時の彼の髪の波のようなうねり (tumble) が、最後の場面の波の vision のうねりの伏流となっているように。

そしてさらに遡っていくと、この心臓のモチーフは、壁にさりげなく掛けてあった「聖心」の色刷り版画にたどり着くであろう。槍に貫かれたキリストの心臓。「麻痺」した身体を持った Margaret Mary Alacoque は、苦行の末、キリストが彼女の心臓を取り、その代わりに、キリスト自身の心臓を彼女の胸に入れるという一つの vision を得る。⁽⁸⁾ キリストが Alacoque に与えた約束は、「聖心」の信者であるイヴリンの母親に、聖者 Alacoque を通して与えられる。そしてそれはまた、イヴリンが母親となした約束を通して、イヴリンにも与えられるのかもしれない。

“Tepid souls shall become fervant.” “Fervant souls shall quickly mount to high

perfection.”⁽⁹⁾——成る程、物語の最初には“dust”から造られたばかりの、生氣のない土くれ人形のようなであったイヴリンは、最終局面では“silent fervant prayer”に唇を震わせるほど agitate され、そして速やかに“perfection”を迎えている。しかし、イヴリンには何か致命的なものが欠落していて、それがこの analogy を滑稽なものに思わせるのである。母親の狂気の記憶に反射的に立ち上がったイヴリンの“raving”である“Escape! She must escape! Frank would save her. He would give her life, perhaps love, too.”をよく見ると、彼女はフランクに“refuge”を求めていることがわかる。しかし彼女のフランクに対する感情、またフランクが彼女に対してどのような感情を懐いているかという点になると、「熱」は少しも読者には伝わってこない。そうしたどこか frigid な部分が、読者の反応をも冷ましてしまうからである。

母親が狂気の果てに死ぬ前に現れ、またイヴリンの決定的な晩に再び現れて、手回しオルガンでもの悲しい曲を奏でるイタリア人の音楽師は、banshee のように不吉な宿命を告げているようである。イヴリンの場合には、それによって、自分自身にもおそらくひた隠しにしていた——そして父親の暴力よりは“palpitations”の隠れた原因であったであろう——母親の狂気が蘇っている。では、母親の方はその曲をどのような想いで聞いたのであろうかと想像していると、読者の脳裏に、「聖心」の色刷り版画の下に置いてあった壊れたオルガンが浮かんでくるかもしれない。もし母親が若い頃に、イヴリンと同じような「逃避」の、しかも海外への「逃避」の誘いがあった、それがやはり悲惨な挫折に終わり、そしてそれを「死者たち」の Gretta がそうであったように、ずっと胸の奥に秘めていたとしたら——彼女の psyche は死に際してその vision を蘇らせ、ひょっとしたらそうになっていたかもしれぬ航海に乗り出さなかったであろうか。しかしそうであっても、やはり世界中の海は彼女の心臓に大きなうねりをもって押し寄せ、彼女を溺らせなかったであろうか。最後のイヴリンの真っ白な顔と何を見ているのか分からぬ目には、死んだ母親の顔が蘇ってきているような気さえする。しかし一方で、仮に「逃避」が成功したとしても、渡った先の異郷の地に幸せが待っているかどうか、イヴリンの場合同様、誰にも保証はできないのである。もの悲しい曲を奏でるイタリアのオルガン弾き自身、夢の果てた哀れな exile、漂白望郷のうらぶれた姿を顕現している。ジョイス自身は、この原稿を提出した直後、恋人と手に手を携えて、イヴリンと同じ the North Wall から海外へ exile の旅に出発している⁽¹⁰⁾。その折りのジョイス自身の心事を忖度することはできないが、何の不安もない人間がこうした作品を書けることは想像しにくい。

イヴリンは、最初逃避行を決心した後、passive にももの想いに耽っていた。すると過去のほうから声がかして、もう一度、行くべきか行かざるべきかを考えるようになる。しかし、彼女の頭ではどちらともはっきり決めかね、時間が過ぎていくのを無意識の口実にして行

かないままで過ごしそうな気配になる。するとイタリア人のオルガン弾きの登場によって、秘められていた過去の vision が蘇り、イヴリンは発作的に飛び出していく。しかし駅に着き、いざ実際に出発しようという段になると、怪物じみた船の姿に怯え、押し寄せる海に溺れる vision に身を硬直させてその場に留まってしまう——「イヴリン」の物語としての妙は、こうしたイヴリンの心理的な揺れにあるのだが、彼女はどちらか一方に決めようとすると、それぞれ恐るべき vision によって行く手を阻まれるという、いわば Scylla と Charybdis に挟まれ、進退窮まって心が引き裂かれるといったような、一種の crucifixion を体験していることになる。それが、やはり苦悩に引き裂かれた「聖心」のイメージと暗合している。

何がイヴリンをこの悲劇に導いたのかを考えてみると、平凡な日常生活の苦勞と、そこから哀れにも生じてくる憧れとの亀裂ということになるのであろうが、その背景として、ここには「近代文明」と「都市」が意識されているように思う。7つの海を渡る「黒船」はまさしく近代文明の化身だが、それが、Melbourne や Canada や Buenos Aires への人間の移動を可能にすることによって、それがなければ生まれ育った土地に一生自足して暮らし続けたかもしれぬ人間の中に、他の土地への「逃避」の憧れを生みつけ、煽っている。7つの海を渡る“black mass”は、イヴリンの目に映った通りの monstrous なものには相違ない。(またこの「黒船」に、それが彼女をどう転んでも連れ去っていくであろう「性」の世界に対する恐怖が表象されているというのも、強調され過ぎてはならないが、見逃してはならない視点である。そうした意味では、父親のふり回す“blackthorn”イヴリンの握り締める“black purse”そしてイヴリンを運び去ろうとしている“black mass”は相互に連絡し合って、イヴリンの「性」に対する心象を窺わせる。)

「近代」はまた「都市」の時代でもある。都市はあたかもそれ自身の意志があるかのように、かつては身体の不自由な人間(例えば“the crippled Keogh”)も生き生きとした自分の持場を保ち得た村落共同体的な空間から、互いに無機的な関係しか持たない人間が行きかうだけの(例えばイヴリンの職場の空きは新聞広告によって埋められる)空間へと変貌していく。それはどこかで我々の精神をも変質させずにはおかないような何かそれまでの歴史にはなかったような要素を含んでいる。この作品冒頭の、孤独な男の踏み締める足音が都市の膨張部分にさしかかった時の軋むような音は、また我々の精神の軋む音にもいる。イヴリンの疲労は、「近代」と「都市」の疲労でもある。

しかし何よりもイヴリンの悲劇を宿命づけているのは、何度も強調されているその受動性と言ってよいだろう。彼女には、強い自我というもの、心の中から迸り出るような激しい情熱がない。フランクに対しても決して愛情を感じているのでもない。また、家族を取るか、恋人を取るかの選択にも、自分からの明確な決断を下すことができない。彼女の生

存は、「自分」というものがない、常に他人の思惑に引きずられていく受け身のそれである。宗教的因習にとってみれば、最も御しやすい、“easy prey”ということになるのであろう。それは、空気中に瀰満する“dust”のように、彼女の無防備な鼻孔から侵入し、彼女の生理を冒していく。危機が迫った時、彼女がすぎるのは「神」であり、考える視点は、“duty”であり、またその“fervant”な祈りの中に、彼女のなけなしの情熱は焼尽されているかのごとくである。そしてそれは、「聖心」の古ぼけた色刷り版画に見られる母親の信心と通いつている。

イヴリンに母親の狂気の vision が憑依したとき、心の中で発する“Why should she be unhappy? She had a right to happiness.”という叫びは、唯一彼女自身の spontaneous な自己主張になっている。しかしそうした自己愛を罰するかのように、「洪水」が彼女を襲い、その結果、再び彼女の顔に完璧な“passivity”が現れる。それは、近代の「健常な」都市生活者たる我々読者の目には、因習に打ちのめされた敗残者の悲しい諦めの表情に見える——よし、それが、謙讓の極みとしての受動性を祝福され、イエスの燃えるような心臓を胸に差し込まれた、神との交わりの法悦の表情の陰画であるとしても——また、イヴリンを麻痺させ疲弊させる元凶のように描かれていた“dust”も、常に「水」が妬みがましく侵食することを狙っている、我々の蜉蝣のような生を辛うじて支えてくれている大地から舞い上がり、都市の上を飛び、海の上を越え、やがて新たな大地の上に静かに回帰して降り注ぐであろう、法爾の弥撒の陰画であるとしても——

——註——

- (1) The sixth promise made to believers in the Sacred Heart.
- (2) テキストには、*Dubliners* (The Viking Press, 1968)を使用した。
- (3) 段落の分け方は幾通りか可能性があると思われるが、ここでは便宜上次のように段落を設定する。
 (第1段落) She sat at the window....; (第2段落) Few people passed....; (第3段落) Home! She looked round the room....; (第4段落) She had consented to go away....; (第5段落) But in her new home....; (第6段落) She was about to explore another life with Frank....; (第7段落) The evening deepened in the avenue....; (第8段落) Her time was running out....; (第9段落) As she mused....; (第10段落) She stood up in a sudden impulse of terror...; (第11段落) She stood among the swaying crowd in the station....; (第12段落) All the seas of the world tumbled about her heart....; (第13段落) He rushed beyond the barrier and called to her to follow....
- (4) Richard Ellman, *James Joyce* (New and Revised Edition, Oxford University Press, 1982), p.43. 参照。
- (5) Warren Beck, *Joyce's Dubliners: Substance, Vision, and Art* (Duke University Press, 1969), pp.112-113参照。
- (6) Robert Graves, *The White Goddess* (Faber and Faber, 1961), pp.245-246参照。

- (7) それらを順に列挙すると、①“head” ②“nostrils” (第1段落) ③“elbow” (第5段落; 但しこれは動詞として使用されている) ④“lap” (第7段落) ⑤“head” (第8段落) ⑥“hand” ⑦“cheek” ⑧“lips” (第11段落) ⑨“heart” ⑩“hand” ⑪“heart” ⑫“hands” ⑬“hands” (第12段落) ⑭“face” ⑮“eyes” (第13段落) となる。
- (8) Donald T. Torchiana, “Joyce’s “Eveline” and the Blessed Margaret Mary Alacoque” (*James Joyce Quarterly*, Volume 6, Number 1, Fall, 1968 所収) は、Eveline の生活と the Blessed Margaret Alacoque との生涯が parallel になっていることを論じている。次の箇所は参考になったので、引用しておく。
- “Born in a small village in Burgundy on July 22, 1647, Margaret Alacoque seemed a predestined child in that she early practiced austerities that rivaled even those of the saints. Young she lost a parent and had to endure severe persecutions from relatives who treated her little better than a servant. At the age of twenty she refused an offer of marriage and in her twenty-fourth year entered the Visitation at Paray-le-Monial founded by St. Francis de Sales... Notwithstanding the glories conferred on her then and later, Margaret Mary Alacoque’s years in the convent were attended by misunderstandings and even hostility from the rest of the religious community. Her chores, like those of Eveline, usually consisted in dispensing household stores and attending young children. Virtually addicted to suffering, she was corrected more than once for her notions of singularity or her clumsiness and slowness, echoes perhaps of the corrections offered Eveline at home by her father and at the Stores by Miss Gavan.” (pp. 23-24)
- (9) 「聖心」の約束については Don Gifford, *Joyce Annotated: Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, second edition, (University of California Press, 1982), p. 49-50 参照。
- (10) Richard Ellman, *James Joyce*, p. 179 参照。